分科会-４：協働

標語⑧互いの違い（差）を受け入れ、互いの思いを伝え合い、協働しよう

課　題

●互いに伝え合う活動

●一人ひとりが孤立せず、ともに働く

■宣教司牧の現状（状況、状態等）■

協働の観点で大切なキーワードは、「互いの違い（差）」と「伝え合う」ことです。

「互いの違い（差）」には、大規模な小教区と小規模な小教区における様々な状況の違い、協働体や地区の違い、山陽側と日本海側や中山間地域の地理的な違い、各々で実践している宣教司牧活動の違いなどがあります。

「伝え合う」ことで大切なことは、まず「互いの違い（差）」を受け入れ、乗り越えることからです。一方通行の伝え方ではなく、相手の立場を考えた伝え方が大切です。

「伝え合う」ための手段は、伝えたい相手に会って言葉で伝えることがもっとも大切なことですが、手紙や電話、教区報など様々な書物、最近ではインターネットを活用したありとあらゆる伝達手段が溢れています。

コロナウイルス感染症の影響で、「伝え合う」ことの大切さを、私たちは本当に実感しています。

特にご高齢の方、様々な制約や制限のある方、心に傷を受けた方、何らかのきっかけで教会に距離を置いている方など、一人ひとりを想いながら、伝え、支え合うことができればと、皆さん、思っていることでしょう。

■現状の問題・課題■

地区、協働体、小教区で、各々が抱えている問題や課題に対し、その問題や課題に至った背景や原因について、どのように理解し受け止めてよいか、半ば諦めていないだろうか。

「互いの違い（差）」を認識し、その状況からどのように改善していかなければならないかいについて、人材不足や理解不足を理由にしていないだろうか。

「伝え合う」ことにおいて、伝える側だけの一方的な対応になっていないだろうか。教会に足を運んだ方のみ、教会からの情報を伝えているような対応になっていないだろうか。信者一人ひとりの状況まで意識が届かず、孤立した方はいないだろうか。パソコンや携帯電話、インターネットなど現代の情報化社会に対応できず「伝え合う」こと対して後ずさりしていないだろうか。

■提言■

各々が抱えている問題や課題について、まずは、後ろ向きに捉えるのではなく、協働体制を構築していく中で、他の地区、協働体、小教区の状況や改善例に関する情報共有化の集いの開催、状況に応じた人的支援を、教区レベル、地区レベル、協働体レベルで行ってはどうか。

まずは一人ひとりが、互いに「伝え合う」ことを意識してもらうため、ミサの中や様々な機会を通じて、司祭から「伝え合う」ことの大切さ発してもらってはどうか。

コロナウイルス感染症の影響における具体的改善のひとつとして、パソコンや携帯電話、インターネットなど活用を積極的に呼び掛けると共に、その活用方法に関する研修会の開催や環境整備に関する財政支援ついて、教区レベル、地区レベルで体制構築と具体的な活動を展開してはどうか。